

社会科の主張

1 教科で育みたい人間像

5 私たちは、社会科を「社会的事象の追求を通して『社会の中でどのように生きるか』について考えをもつ教科」として考える。「社会」とは、家族や地域、国家、世界など、何らかのつながりをもった人々の集まりやそこで行われる営みであり、「社会的事象」とは、社会における現在や過去の出来事のことをさす。

先人達はある社会的事象に出会ったとき、空間的、時間的な視点からそれをとらえ、よさや問題点、またはそこに携わる様々な人々の思いや考えを吟味しながら、よりよい社会のあり方を追求し続けてきた。その積み重ねが今の社会の姿を形づくっている。私たちが生きる時代は、多様性を認め合う動きやAI技術の発達、国家間の対立の広がりなど、人々の生活や社会が急速に変化している。その中で、価値観の違いや利害関係による対立が深刻化し、合意を導き出しづらい状況が見られる。さらには高度な情報社会となったことから、様々な情報が錯綜し、真実が見えづらくなっている。それらの状況であっても、未来に期待を抱き、よりよい社会を自分たちの手で創りあげていくことが重要である。自己の立場や状況を意識するだけでなく、他者が重視することやその人が置かれた立場を理解したうえで、すべての人にとって最善の結論を模索し、よりよい社会の実現をめざし行動しようとするのが大切だと考える。

そのため、社会科では単に社会に適応して生きる人ではなく、よりよい社会のあり方を追求し続ける人、つまり「社会に参画し、創り続ける人」を育みたいと考えている。

20

2 教科で願う学び

私たちが願う学びとは、「課題解決をめざして、根拠に基づいた自分なりの考えを、他者と練り上げながら、よりよい社会の構築に向けて発展させていくこと」である。子どもたちはある社会的事象に出会ったときに、「なぜだろう。おかしいのではないか」という気づきや疑問、「解き明かしてみたい」「これはみんなで考える価値がありそうだ」という思いなどをもつことで、全員で共有する「問い」が生まれ、社会のあり方を追求していく。

子どもたちが「問い」を追求していく過程では、「位置や空間的な広がり」「時期や時間の経過」「事象や人々の相互関係」に着目して社会的事象をとらえ、それぞれの視点から比較や分類または統合したり、地域の人々や国民の生活を結びつけたりしながら考察していく。そうすることで社会的事象同士のつながりを見だし、自分なりの考えに根拠をもたせていく。さらに、「問い」を共有した仲間と自分なりの考えを語り合う中で、現在の社会とのつながりを感じ、社会で生じている矛盾や現実とのギャップに着目したり、他者の異なる考えや価値観に出会ったりして、自分の考えを発展させていく。そのために、子どもたちが社会的事象同士のつながりを見だし、語り合いたくなるような「問い」を子どもと共に創っていきたい。

私たちが願う学びを実現するためには、授業の中で「様々な解釈の仕方や多様な価値観を尊重しながら、『すべての人にとって最善となる社会のあり方』を創りあげようとする営み」を巻き起こしていくことが必要だと考える。そのような営みには、多様な他者の存在が必要不可欠である。自らの考えをより深めたり、広げたりするために、多様な他者とかかわり、語り合い、考察することが重要である。そうすることで、自分だけでは気づくことができなかった視点からとらえたり、公正な判断や、より合理的な結論を導いたりすることができる。

その過程で、子どもたちは最善の結論を求めるがゆえに対立したり、解釈のズレが生じたりする。そのようなときにこそ、考えの根拠や互いの価値観について語り合うことで、相手の見方や考え方に対する理解を深めたり、自分が大切にしたい考えや価値観に気づいたりしていくはずである。そして、互いが納得できる社会の姿を見だし、新たな社会の姿を創りあげるだろう。

45